



二枚暖簾^{のれん}をくぐるとそこは、リアル京都。

今日もいけず女湯に 来てしまった

中村佳代

伏見温泉（京都市伏見区）筆者撮影

常連客のせいで嫌な思いをした！

そんな感想を耳にする京都の女湯銭湯。銭湯好きの私でも、正直常連さんはおっかないと未だに思う。彼女たちの仕切る浴場の治安はハード寄り。でもそうじゃなきゃ味わえない独特の面白みがそこにあるのを、何年か通う中で発見した。「いけずでスリリングだけど、ふとまた行きたくなる」そんな、湯気に隠れた京都の醍醐味をご紹介します。

「それ他の人のやつよ！」定員2名の狭いサウナに入った途端、先客のいかにも常連なマダムが私に言ってきた。あれは忘れがたい5年前の敗北。一番長く暮らした所が地元から京都に更新された頃、スーパー銭湯にハマっていた私は「そろそろ町銭湯デビューしちゃうか」となって自宅近くの銭湯を訪れた。京都の銭湯は玄関の時点で男湯女湯に分かれることが多い。暖簾^{のれん}

をくぐり靴は下駄箱に入れて番台に入浴料を払う。すぐ脱衣場なので、長方形の籠に脱いだ服と荷物を入れて籠ごとロッカーにしまう。これは予習通り。体と髪を洗って熱々の湯船に少し浸かったら次はサウナ。体を拭き浴場入口前に山ほど積まれていたスポンジマットを1枚取っていざ——それが間違いだった。行きつけのスーパー銭湯では、サウナ入口に客が自由に使えるサウナマットが積んであるのでこれもそういうやつだと思ってしまった。マダムの剣幕から察するに、この銭湯でそれらは全て常連さんたちの私物らしい。脱衣場に私物を放置するなんてマジか！ ただちにサウナを退室しマトを洗う。元の場所に戻しふと浴場を見ると、マダムがこちらをチラチラ見ながら他の常連客と何やら話している。おぉー、低評価レビューで見たところあるやつが今私にも起きている。なんととも居心地が悪くなり、髪も濡れた

まま逃げ出すように退店。二度と来るかと思ったそれが初めての町銭湯体験。これだけ聞くと、誰も京都の女湯に行く気は起きないだろう。でも私は今もその銭湯に通っている。

常連さんという存在

男性に常連トラブルのことを話すと「そんなの男湯で起きないよ！」と驚かれる。関東の女性には「そういうのは見ないですね」と言われたこともある。定番はやはり「場所取り」だ。スーパー銭湯でも町銭湯でも、場所取りされない女湯は京都に存在しない。常連さんには「いつもの場所」がある。洗い場はお風呂セットで確保。「場所取り禁止」という張り紙のあるサウナには、汗がびっちり溜まったサウナマットが置きっぱなし。さらには砂時計にマッサージ道具やら、浴場に持ち込まれる物はさまざまだ。SNSには時々「場所取り注意してやったぞ」と

武勇伝のように語る人が出現する。すごいなあ、観光で来た人なのかなあ、生活圏の私がそんなことしてマークされたらおしまいだよ。かつての大失敗で萎縮した私は、なるべく常連客のいない女風呂や時間帯を求め市内を転々とする日々であった。だがある日、私の常連観が一転する出来事が起きた。

その日、行きつけのスーパー銭湯に閉店間際に入った。いつもと違って空いているサウナを満喫していたら、たいへん大柄な女性が入ってきた。迷うことなく入口付近の座席にどっかりと腰を据える。この動き間違いない、常連だ。「ふー、あちー」と呟き続ける彼女と密室二人きり。そして彼女は持ち込んだ大きな水をしゃぶりはじめた。びちゃ、じゅる、ぼり。静かな空間に響き渡る音。さすがに耐え切れず水風呂に移動してリラックスしていると、彼女が合流してきた。あ、やばいかも。ドボン。ドバーツ！ 首まで水

に浸かっていた私は波にのまれてひっくり返った。普通は怒る場面なのかもしれない。でも笑えてきてしまい、ひらめいた。「常連って、アトラクションだ」。無性に、初戦敗退したあの銭湯に再挑戦したくなった。

そして共存

久しぶりに通いはじめたら、山積みスポンジマットが脱衣場から消えていた。かつては常連客らが持ち込んだものだった、ある日店主によって処分されたようだ。確かにこの銭湯、ほかに比べて私物が多すぎる。あの常連マダムは、山積みマットが現役で使われていた頃もずっとここに通っていたに違いない。注意してきたのも当然か。いや、やっぱり意地悪だったのかも。今ではサウナマットを持参して、マダムの隣に座ることもある。「狭いから出てって」なんて言われたらどうしようと考えながら入るサウナはスリル満

点。彼女はいつもストープ前の特等席と、水風呂真横の洗い場を何時間も場所取りしている。閉店は23時。マダムが浴場を出るのはいつも22時40分。そこから閉店まで残されたわずかな時間が私のフリータイムだ。私はせいぜい月に数回通う程度。常連さんたちは毎日いつもの銭湯に来て、いつもの場所でルーチンをこなす。これぐらいが程良い共存だと感じている。そんな中で有料ドライヤーの残り時間を譲ってくれる人、帰り際に「ほな、おやすみなさい」と声をかけてくれる人、若い利用客に銭湯マナーを指導する人。銭湯ごとに個性豊かな常連さんは、その空間で体験するほどに味わい深い。もちろんやばい人もいるけど、それはそれで誰かへの土産話にすればたいへん盛り上がる。全身どころか心まで裸になつて京都を体験できる場所が、路地の先にある。